

【論文】

## 北海道アイヌとフクロウの関係

### —捕獲、飼育、送りの観点から—

山本 晶 絵

**要 旨** : アイヌの古老らに対する聴き取り調査の記録を対象とし、北海道アイヌとフクロウの関係について、捕獲・飼育・送りという観点から記述の整理・検討を行った。フクロウ送りの詳細を記録した資料は数少なく、その多くはすでに先行研究で取り上げられている。しかし、フクロウ送りに関する断片的な記述やフクロウそのものに関する記述のなかには、これまでに注目されてこなかったものも少なくない。これらの記述を検討することで、アイヌとフクロウの関係について、新たな視座を得ることが可能になると考える。本稿では、資料中に断片的にみられるフクロウに関する記述のうち、特に捕獲・飼育・送りという、個体の獲得以降、送りに至るプロセスに関するものを広く抽出・整理し、北海道アイヌとフクロウの関係について、再検討を行うことを試みた。これにより、当時フクロウは積極的な狩猟の対象ではなく、主な入手方法は幼鳥の生捕りであったこと、その際に親鳥の捕獲・殺害はみられなかったこと、基本的に檻で飼育されたが、放し飼いが行われた可能性も推察できること、道北など一部の地域を除き、北海道の広い範囲で送りに関する記述が確認できたこと、そして、送りを指す語は多様であったことが示された。なお、これらの記述における「フクロウ」の多くはシマフクロウ *Ketupa blakistoni blakistoni* を指すことが推測されるが、エゾフクロウ *Strix uralensis japonica* を送るという事例もみられた。

**キーワード** : フクロウ、狩猟、飼育、送り、アイヌ文化

#### 1. はじめに

アイヌ文化に関する諸研究において、クマ送りは、アイヌの精神文化を代表する重要な要素の一つとして研究対象とされてきた。しかし、そもそも「送り」とは「動物の霊魂が宿るとされている部分を丁重に扱い、その動物の再生を祈る」（北海道立北方民族博物館 1991 : 52）ものであり、その対象はクマ以外の動物にも及ぶ（秋野 2004 : 516 ; 秋野 2009 : 60 ; 佐藤 2004）。北海道アイヌにおいては、特にシマフクロウの送りが、クマ送りと並んで非常に重要な位置づけにあったことが指摘されてきた（秋野 2004 : 521 ; 佐藤 2004 : 88 ; 竹中 2006 : 87 など）。

しかし、フクロウ送りはクマ送りと比較すると資料が少なく、詳細については明らかになっていないことが多い（犬飼・名取 1969 : 549 ; 大塚 1987 : 81 ; 大塚 1995 : 110 ; 長谷川 2003 : 77 ; 宇田川 2004 : 115）。その理由として、当時の研究対象はクマ送りが中心で、フクロウ送りには関心が持たれなかったこと、フクロウ送りが研究対象として注目された時期にはすでに、その送りを経験した古老が少なくなっていたことが挙げられる（犬飼・名取 1969 : 549 ; 長谷川 2003 : 77）。大塚（1987 : 81 ; 1995 : 110）によると、アイヌのフクロウ送りが学術的に注目されるようになったのは 1930 年代のことで、フクロウ送りが儀礼としての役割を發揮したそれ以前の時期に、儀礼の様子を「確実に眼にして」全体を記録した者はいない。1930 年代には、執行者として儀礼に直接関わった経験を持つ者は存在せず、幼い頃の経験や見聞について語ることでできる古老がわずかにいるのみであった。

フクロウ送りに関する先行研究には、更科（1933 ; 1984）<sup>1</sup>、佐藤（1961）、犬飼・名取

(1969)、更科・更科(1977)などの著作がある。これらは、研究者自身が調査を行い、そこで得た情報を報告したものである<sup>2</sup>。また、1980年代以降には、これらの先行研究に加え、北海道教育委員会の『アイヌ民俗調査』に係る報告書や近世の史料を用いた研究が行われるようになった。具体的には、大塚(1977; 1987; 1995)、長谷川(1995; 2003)、宇田川(2004)、竹中(2006)などの研究が挙げられる。しかし、先行研究では資料が少ないとの認識から事例の列挙に重きが置かれ、送りの全道的な地域比較や歴史の変遷については検討の余地が残されていた。

本稿では、シマフクロウの神性について整理した上で、アイヌの古老らに対する聴き取り調査の記録に散見されるフクロウに関する記述のうち、特に捕獲・飼育・送りという、個体の獲得以降、送りに至るまでのプロセスに関する内容を抽出し、北海道アイヌとフクロウの関係について、再検討を行うことを試みる。これは、フクロウ送りの地域比較や歴史の変遷について考察を行うための基礎研究として位置づけられ、聴き取り調査の時代における北海道アイヌとフクロウの関係を捉えなおすことを目的とするものである。

## 2. 方法

アイヌの古老らに対する聴き取り調査の記録<sup>3</sup>を主な対象として、文献調査を行った。本稿で対象とする記述はインフォーマント自身が経験・見聞した記録に限り、口承文芸は除外した。送り儀礼に関する記録の多くはすでに先行研究で報告されているため、本稿では儀礼そのものに加え、フクロウの捕獲および飼育に関する断片的な記述にも焦点を当て、広く北海道アイヌとフクロウの関係を捉えなおすことを試みた。

本稿で使用した資料は、表1に概要を示した。本文中で資料を引用する際は、資料名と併せて、表1に対応する番号および成立年を付記した(例:『コタン探訪帳』[7;1950-1970])。引用は、原則として原文に従って表記するが、句読点を適宜補い、旧字体は新字体に改めた。ただし、インフォーマントの氏名に旧字体が含まれる場合は、そのままの表記とした。

『コタン探訪帳』[7; 1950-1970]は弟子屈町図書館に所蔵される更科源蔵の調査記録(ノート)であり、その話者については、本人および親族の承諾を得ていないことから、齋藤(2002)に準じて姓・名順のイニシャル表記とした。引用文中の傍線および〔 〕は筆者による補足であり、汚損で判読できない文字は□で示した。また、原文からの引用を除き、本稿ではアイヌ語表記を片仮名に統一し、特定の資料に拠らない表現は“ ”付きで示した。

聴き取り調査資料に現れる「フクロウ」という記述のなかには、シマフクロウのみならず、エゾフクロウや他のフクロウ類を指す可能性が推察されるものも少なくない(山本2017)。今回対象とした資料中にも、エゾフクロウを送ることがあったという記述がみられ、アイヌとフクロウの関係については、対象とする種を広げるなど、より多角的な視点をもって再検討を行う必要があると考えている。本稿では、シマフクロウやエゾフクロウなど特定の種に言及する場合は種名を記し、それ以外の場合は「フクロウ」と表記する。

表 1. 本稿で使用した資料

No.	著者・編者	成立年	資料名 ※1	出版者
1	アイヌ民族博物館 編	2001	『虎尾ハルの伝承：鳥』	白老：アイヌ民族博物館
2	青柳信克 編	1982	『河野広道ノート 民族誌篇1：イオマンテ・イナウ篇』	札幌：北海道出版企画センター
3	宇田川洋	2004	『聴き取り調査で得られた民族学的情報(1)』宇田川洋編『クマとフクロウのイオマンテ - アイヌの民族考古学』pp.143-181	東京：同成社
4	佐藤直太郎	1961	『釧路アイヌの稿集送り：モシリコロカムイオボニレ』佐藤直太郎『佐藤直太郎郷土研究論文集』pp.241-263	釧路：釧路市
5	更科源蔵	1950-1970	『コタン探訪帳』	※2
6	藤村久和 編	2009	『平成20年度 アイヌ民俗文化財調査報告書：民俗技術調査1(狩猟技術)』	札幌：北海道教育委員会
7	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1982	『昭和56年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査I)：旭川地方』	札幌：北海道教育委員会
8	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1983	『昭和57年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査II)：旭川地方』	札幌：北海道教育委員会
9	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1984	『昭和58年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査III)：静内地方』	札幌：北海道教育委員会
10	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1985	『昭和59年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査IV)：静内・浦河・様似地方』	札幌：北海道教育委員会
11	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1986	『昭和60年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査V)：釧路・網走地方』	札幌：北海道教育委員会
12	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1987	『昭和61年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VI)：十勝・網走地方』	札幌：北海道教育委員会
13	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1988	『昭和62年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VII)：沙流・十勝地方』	札幌：北海道教育委員会
14	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1989	『昭和63年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VIII)：鶴川・有珠地方』	札幌：北海道教育委員会
15	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1990	『平成元年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査IX)：千歳地方』	札幌：北海道教育委員会
16	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1991	『平成2年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査X)：千歳地方』	札幌：北海道教育委員会
17	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1992	『平成3年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XI)：道南東部地方』	札幌：北海道教育委員会
18	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1993	『平成4年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XII)：道東地方』	札幌：北海道教育委員会
19	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1994	『平成5年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XIII)』	札幌：北海道教育委員会
20	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1995	『平成6年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XIV)：補足調査1』	札幌：北海道教育委員会
21	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1996	『平成7年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XV)：補足調査2』	札幌：北海道教育委員会
22	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1997	『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XVI)：補足調査3』	札幌：北海道教育委員会
23	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1998	『平成9年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XVII)：補足調査4』	札幌：北海道教育委員会
24	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1999	『平成10年度 アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XVIII)：補足調査5』	札幌：北海道教育委員会
25	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1989	『昭和63年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズII：アイヌのくらしと言葉1』	札幌：北海道教育委員会
26	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1991	『平成2年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズIV：アイヌのくらしと言葉2』	札幌：北海道教育委員会
27	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1993	『平成4年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVI：アイヌのくらしと言葉3』	札幌：北海道教育委員会
28	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1995	『平成6年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVIII：アイヌのくらしと言葉4』	札幌：北海道教育委員会
29	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1997	『平成8年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ10：アイヌのくらしと言葉5』	札幌：北海道教育委員会
30	北海道教育庁社会教育部文化課 編	1999	『平成10年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ12：アイヌのくらしと言葉6』	札幌：北海道教育委員会
31	北海道教育庁社会教育部文化課 編	2001	『平成12年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ14：アイヌのくらしと言葉7』	札幌：北海道教育委員会
32	北海道教育庁社会教育部文化課 編	2003	『平成14年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ16：アイヌのくらしと言葉8』	札幌：北海道教育委員会
33	本別町教育委員会 編	1989	『沢井トメノ：十勝本別分類アイヌ語辞典』	本別：本別町教育委員会
34	吉田巖著 帯広市教育委員会社会教育係 編	1957	『帯広市社会教育叢書 No.3：愛郷譚 アイヌ古事風土記資料』	帯広：帯広市教育委員会

※1：本文中で使用資料名を引用する際は以下の通り略記し、本表に対応する番号を付記する。

1. 『虎尾ハルの伝承』、2. 『河野広道ノート』、3. 『聴き取り調査で得られた民族学的情報(1)』、4. 『釧路アイヌの稿集送り』、5. 『コタン探訪帳』、6. 『民俗技術調査1(狩猟技術)』、7-24. 『アイヌ民俗調査』(例：『アイヌ民俗調査I』)、25-32. 『アイヌのくらしと言葉』(例：『アイヌのくらしと言葉1』)、33. 『十勝本別分類アイヌ語辞典』、34. 『愛郷譚』

※2：『コタン探訪帳』(全19冊)は弟子屈町図書館に所蔵される、更科源蔵の調査記録(ノート)である。

### 3. シマフクロウの神性

ここでは、アイヌがシマフクロウをどのような存在として捉えていたのかについて整理する。シマフクロウはアイヌ語で“コタンコロカムイ(村を守る神)”、“カムイチカブ(神の鳥)”、“フムフムカムイ(フムフムと鳴く神)”、“ニヤシコロカムイ(木の枝を所有する神)”、“アノノカカムイ(人間の姿をした神)”、“カムイエカシ(祖先の神)”、“モシリコロカムイ(大地を守る神)”などと呼ばれ、北海道の多くの地域で“カムイ”として崇められてきた(知里 1962; 更科・更科 1977; 長谷川 1995; 宇田川 2004; 山本 2017)。シマフクロウが“カムイ”として崇められる理由について、佐藤(1961: 243-245)は、①体格と風貌、②鳴き声、③魚を授けること、の3点を挙げている。この3点について、他の記録を検討したところ、①は他ではみられなかったが、②および③は他の記録においても同様の記述を確認することができた。

### 3-1. 体格と風貌

佐藤（1961：244）は、シマフクロウが“コタンコロカムイ”として崇められる理由の一つとして、体格と風貌を挙げている。

コタンコロカムイを、和人の方では縞梟と言っているが、つねに人里を遠く離れた深山幽谷に棲んで巨木の洞穴に巣を造っている。両翼を張ると二メートルに及び、翼をすばめて直立すると一メートルに達する堂々たる体格で、鋭い鉤形の嘴と爪、円い大きな金色の眼、頭上には短い角のような耳毛を有する、勇猛で威厳のある風貌は、鷲などの及ぶところでない。そして飛び方がまた異なっていて、普通の鳥のように頸を長く前方に突き出して身を水平にして飛ぶこと少なく、体を垂直に、立つたような姿をして、あの大きな翼に羽音をさせないで上から覆い被ぶさるように飛ぶのは、不思議だという。

「釧路アイヌの縞梟送り」[4;1961]

世界最大のフクロウであるシマフクロウの生物学的な特徴と神性との関わりは、この佐藤（1961）を引用するかたちで、先行研究ではたびたび言及されてきた。しかし、今回対象とした資料においては、この「釧路アイヌの縞梟送り」[4;1961]を除き、体格や風貌に関する記述は確認できなかった。大きさや風貌・風格という形態的特徴が、シマフクロウを他の鳥類と一線を画する存在にした可能性は十分に想定できるが、インフォーマントはむしろ他の点に、シマフクロウの特徴および神性を見出していたようである。

### 3-2. 鳴き声

対象とした資料の記述から、シマフクロウの鳴き声は大きく3つの役割を果たすことが推察された。つまり、①悪いものを遠ざける、②変事を知らせる、③クマの居所を知らせる<sup>4</sup>というものである。①は主に先行研究で、「コタンに闖入しようと忍び寄るニヒネカムイ（悪魔）を叱り飛ばして追い払ってくれている」（佐藤 1961：244）、「部落の近くに来て夜の暗闇が割れるほどの大声を出し、闇の奥から忍び寄る魔物をどなりつける」（更科・更科 1977：555-556）と説明されてきた。②および③に関しては、以下の記述がみられた。

〔注：シマフクロウが〕戦争当時に、おらスモモの木、家のねき（そば）にある、そこさ（へ）来てハウコロ hawkor（声をたてる）したもんなあ。〔略〕空襲だって騒いで、カムイ タワカネネ ナ kamuy tawakanene na（神がこういうことになるぞ）気つけて（気をつけなさいと）ということ言うに来たんでないべかと思って。〔カムイ ウンピルマ kamuy unpirma（神が人に危険を知らせる）〕

『虎尾ハルの伝承』[1;2001]より虎尾ハル氏による語り（静内町農屋）

大きなランコ ranko「カツラ」の木があった。毎晩コタン コル カムイ kotan kor kamuy「シマフクロウの神」が来て鳴いた。あるとき、イタククニ Itakkuni の家の屋根に来て鳴いた。そのイタククニは、コタンで一番年上で賢い人で、カムイが守っていた人だった。カムイは毎晩イタククニの所に来て鳴いていた。皆は恐ろしく

て、イタククニの家に寄りつかなかった。イタククニの病気は少し回復したが、結局死んだ。それから、コタン コル カムイはコタンに来なくなった。これも私の代の話である。

『アイヌ民俗調査IV』[10;1985] より浦川タレ氏による語り（浦河町野深）

コタン コロ カムイ〔注：シマフクロウ〕は、コタンに何か悪いことが起きそうな時には教えてくれるので大事にした。

『アイヌ民俗調査X』[16;1991] より白沢ナベ氏による語り（千歳）

ニヤシコロカムイ〔注：シマフクロウ〕がフーン、フーンと鳴いているのを聞くと、物すごく寂しくなるが、その鳴き声を聞けば、必ずヒグマが、その方角にいると判断する。

『民俗技術調査 1(狩猟技術)』[6;2009] より根本與三郎氏による語り（白糠）

山の猟小屋（カシコツ kaskot）に入ると泊まると必ずコタン コロ カムイ kotan kor kamuy「シマフクロウ」が鳴く。鳴いている方向に行くと必ずクマがいる。

『アイヌ民俗調査V』[11;1986] より日川キヨ氏による語り（阿寒町上徹別）

kamuy（カムイ＝熊）の居る所を、シマフクロウは教えてくれるという。

『十勝本別分類アイヌ語辞典』[33;1989] より沢井トメノ氏による語り（本別）

この他、「雄は unhu、雌は hun といふ」（『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より T.T 氏、Y.T 氏による語り／虻田）というように、フクロウの鳴き声そのものに言及する記述もみられた。これは「フクロウ」に関する記述だが、雄の2声に対する雌の1声の鳴き交わりはシマフクロウの生態と一致しており、シマフクロウを指す可能性が高いと考えられる。また、シマフクロウの呼称の一つに、鳴き声に由来する“フムフムカムイ”があることから、その鳴き声はアイヌにとって重要な意味を持つものであったことが推察される<sup>5</sup>。

### 3-3. 魚を授ける

シマフクロウは唯一の、亜寒帯に分布する魚食性のフクロウである（山本 2004：207）。聴き取り調査の記録のなかには、シマフクロウが川辺に残す魚を、アイヌが有難がって持ち帰るといった記述が複数みられた。

また、夜間飛んで来て止つて鳴いたと思われる木の下に、翌朝行つて見れば必ずといつてよいくらい、数尾の鮭、鱒を川から引き上げて、その一、二尾を喰い、残りをそのままにしてあるのを発見する。これをアイヌは、カムイがアイヌの冷い水に入つて食糧の魚を取る苦労を可哀想に思つて、獲つておいてくれたのだとしている。

「釧路アイヌの縞鼻送り」[4;1961]

## 縞鳥

男は *kotan kor kamuy* といふが女は *ano anunuka kamuy* といふ。ニトマップの川で魚や鱒をよくとつてくれた。

『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より K.U 氏 (女性) による語り (十勝清水)

フクロウ<sup>6</sup> (カムイチカプ *kamuycikap*) が マス (イチャヌイ *icanuy*)、アメマス (トウクシシ *tukusis*) を河原 (ピタル *pitar*) に上げて目だけを食べ、後を残して行くことがあった。それを拾って帰ると母はカムイ イメク アン ルウェ ネ ワ *kamuy imek an ruwe ne wa* 「神から授かったものだ」といって喜んだ。

『アイヌ民俗調査X』[16;1991] より 白沢ナベ氏による語り (千歳)

(葛野 [注: 葛野辰次郎氏]) 何クマさんはな、ただ、たまに、事によってはイカオシケ <*ikaosike* = 土産物をもって来る>してくるわけよな、だけど本当にあのコタンコロカムイ [注: シマフクロウ] はイカオシケはしないけれども、たまにイカオシケもするんだよ。コタンコロカムイっていう神様は、あのアキアジとってな、クマのとこさ持って来て置くもんだと。

『アイヌのくらしと言葉 3』[27;1993] より 葛野辰次郎氏による語り (静内町東別)

最後の一例は、人間ではなくクマのところに魚を置くという内容だが、シマフクロウが捕って食べ残した魚を、人間をはじめ他の生き物に授けるという構図が示されている。また、「魚を捕るフクロウ」に関する記述は上記以外にも確認することができ、これらの多くは生態的な特徴から、シマフクロウを指すことが推測される。

これらの事例からは、シマフクロウは単なる鳥ではなく、人間に対し様々な働きかけを行う“カムイ”として捉えられていたことが再確認できた。“カムイ”のなかでも特にクマ(ヒグマ)が神聖視される理由は、その肉や毛皮、熊の胆などの物質的価値と、人間とクマとをつなぐ精神的価値という2つの側面から説明されるが(佐々木 2007: 2; 竹中 2006: 95-99)、シマフクロウの場合は、バチェラー (1925: 330) が「食品としてでなく食品を斡旋するのである」と表現したように、物質的価値よりも精神的価値、あるいは「間接物質的価値」(竹中 2006: 96) が特に重視されていたものと考えられる。この点をふまえ、次章以降ではフクロウの捕獲、飼育、送りのあり方について検討する。

## 4. フクロウの捕獲

巣立ち前の幼鳥の生捕りは、佐藤 (1961: 246-247) や更科・更科 (1977: 547) などの先行研究ですでに言及されてきた。ここでは、生捕り以外の方法でフクロウが入手された可能性を検討するため、広くフクロウの捕獲に関わる記述を抽出し、考察を行った。

### 4-1. 狩猟<sup>7</sup>活動の有無

フクロウの捕獲に関しては、「獲る (獲った)」よりも「獲るべきではない」という記述が多くみられた。以下は、特にシマフクロウを指すことが明らかな5つの事例である。

コタンコロカムイ kotankorkamuy ふくろう / [シマフクロウ]

[コタンコロカムイ kotankorkamuy は] あれ獲るべきでないんだな。

『虎尾ハルの伝承』[1;2001] より虎尾ハル氏による語り (静内町農屋)

### 縞鼻

千才〔注：千歳〕の孵化場 [N.K] というものの父がシコロの木で丸木舟をつくつて  
みたら木の枝に雌の鼻がとまってみてみたので鉄砲でうつてそれを舟につんで下つ  
て来ると途中で雄の鼻がみてどなつたら舟が真二に裂けてしまった。

だから iso ani kamuy はとつたり飼つたりしてはいけないものだ。

『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より S.T 氏 (男性) による語り (新十津川)

### 鼻

kotan koro kur (mosiri kotori<sup>8</sup> ともいふ) が kunne rekki kamuy を使ひにして□師に熊  
の居どころを知らせに来て熊のゐるところへ帰つて行く。kotan koro kur でも kunne  
rekki kamuy でも先にとると熊が遠慮して来なくなるからとらないものだ。

『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より Y.K 氏 (男性) による語り (鶴居村下雪裡)

(浦〔注：浦川タレ氏〕) そして、捕る (からいなくなった) んでないの？ 野深行つた  
らねー、すぐ、川辺、ずーっと山なんだよ。高い山。後ろもー、こっちも。それに  
一、〔注：声を〕聞いたことないもの。

『アイヌのくらしと言葉 3』[27;1993] より浦川タレ氏による語り (浦河町野深)

わしもシマフクロウ一回獲ったことあるけど、 声聞いたのは戸蔦の奥だけ。山入っ  
てもあんまり見たことないから、本当にいない。〔略〕 いかに禁猟だったって鉄砲  
撃ちのずるいやつにあつたら獲られるからね。やっぱりいないっていうのが本当だと  
思うね。

『アイヌのくらしと言葉 2』[21;1991] より山川弘氏による語り (帯広伏古)

山川氏 (帯広伏古) の事例は狩猟による捕獲である可能性が高いが、浦川氏 (浦河町野  
深) の事例は、生捕りが続いたことでシマフクロウの個体数が減少したことに言及してい  
る可能性も否定できず、狩猟があつたとは必ずしも断言できないと考える。

シマフクロウだけでなく、広く「フクロウ」まで範囲を広げて記述を検討すると、「獲る  
べきではない」という記述が 3 例 (千歳 2 例、阿寒 1 例)、「獲る (獲った)」という記述が  
1 例 (長万部)、更に追加される。多くの事例で「獲る／獲らない」という意向を読み取る  
ことができたが、以下のように、ある状況で限定的に狩猟するという記述もみられた。

コタンを守ってくれる尊い神様であるから、すすんで獲りに出掛けることはしない  
けれど、狩猟に出て獲物がなく食物に困つているとき、たまたま縞鼻がいた場合は、  
カムイの方から進んでアイヌの方へ獲られに近寄つてきたものとして、つまり、神様  
から授つたものと勝手に都合の良いように解釈して、これを射ち取り、チカツプ・イ

ナウ（鳥の木幣）とブスクスリ（酒の代用品で麴と米を混合したもの）を捧げるだけのカムイノミ（お祭り）をして、簡単なカムイオブニレ（神送り）でその霊は天国に送られ、その肉は食料に供されるのである。

「釧路アイヌの縞鼻送り」[4:1961]

Kunne rek kamuy [注：エゾフクロウ] を追って行つてとるといふことはないが、山を歩いてみてこつちが近よつても逃げないのは獲つて、山で大きな nusa をたてて送る。これは肉が食ひたくてやるのではなく yaisiboririka（恩返し）をしてくらひたいので送つてやるので、春先でしかやれるものではない。送る名はない。inau は同じ cikapinau を7本ぐらゐあげ、めしなどをあげる。

『コタン探訪帳』[5:1950-1970] より Y.K 氏（男性）による語り（鶴居村下雪裡）

Y.K 氏（鶴居村下雪裡）の事例からは、シマフクロウ以外のフクロウの送りがあった可能性が示唆される。フクロウ送りのあり方を正しく理解するためには、フクロウ送りに関する記述における「フクロウ」が指す種について、慎重に検討を行う必要があると考えている。これらの記述からは、シマフクロウを含む「フクロウ」は当時多くの地域で、積極的な狩猟の対象としては認識されていなかったことがわかる<sup>9</sup>。

#### 4-2. 幼鳥の生捕り

フクロウの入手方法としては、幼鳥を生捕って持ち帰るという事例が最も多くみられた。クマとは異なり、フクロウの場合は上手く巣立つことのできない幼鳥などを生捕るのであって、その際に親鳥を捕獲・殺害することはなかったようである。

おれが十六の時、親父に連れられて山に熊捕りに行つたことがある。〔略〕親父は、この根つこの中に、モシリコロカムイ〔注：シマフクロウ〕のヒヨツコがいる、と言つたので、だまつて耳をすますと、中でピツコピツコと鳴いているのが聞える。

〔略〕親父は腐つた木の上の方にある洞穴の巣から出ようとして落ち込んだのだ、だまつておけば死んでしまう、といつて、腐れ木の一部を斧で切り割つて、ヒヨツコを生捕りにして、その日はそれで獵の方は止めにして、大事に懐に入れて持ち帰り、古いシントコ（行器）の中に枯草を敷いて巣を造つて育てることにした。

「釧路アイヌの縞鼻送り」[4:1961] より秋辺福松氏による語り（阿寒）

イタククニ Itakkuni というアチャポ acapo がナイペカに行つて、巣から落ちたコタン コル カムイ kotan kor kamuy〔注：シマフクロウ〕の仔をもつてきた。

『アイヌ民俗調査IV』[10:1985] より浦川タレ氏による語り（浦河町野深）

以上はシマフクロウに関する事例だが、「フクロウ」に関するものを含めると千歳と新冠で更に1例ずつ、幼鳥を生捕りにするという内容の記述を確認することができた。

#### 4-3. 死亡個体の持ち帰り

死んだシマフクロウを持ち帰り送ったという記述が、千歳と静内町農屋の2か所でみられた。これらはインフォーマント自身が経験した、最も近年に行われた「送り」の事例であると考えられる。

養ったのではなく、電線にぶつかって死んだのを私が拾って行った。それを父親が送ってくれた。

『アイヌ民俗調査X』[16;1991]より白沢ナベ氏による語り（千歳）

おらもコタンコロカムイ kotankorkamuy [注：シマフクロウ] ひらって（拾って）、エカシ ekasi（おじいさん）[注：虎尾ハル氏の夫] にイワクテ iwakte（～を神の国に送る）してもらった。やっぱり餅搗いて、イペエコツ ipeekot（餓死する）したもんだかな。かわいそうに。戦争当時だ。

『虎尾ハルの伝承』[1;2001]より虎尾ハル氏による語り（静内町農屋）

このような事例は、比較的古い時代の記述にはみられない。また、虎尾氏（静内町農屋）がこの送りに関する文脈で「[私は] エランペテケ ペ erampetek pe（分からない者）だもの」と述べていることから、このシマフクロウの「送り」はフクロウ送りの衰退期に特有のものである可能性が高いと考えられる。しかし、アイヌにとってシマフクロウの価値が主に精神的なところにあり、「常に愛されて」（パチェラー 1925：325）いたならば、時代を遡ったとしても、アイヌが死んだシマフクロウを見つけた場合には、持ち帰って送ることがあったのではないかと推察される。

フクロウの入手方法に関する記述からは、当時多くの地域で、フクロウは積極的な狩猟対象としては認識されておらず、幼鳥を生捕る場合にも、親鳥の捕獲・殺害はみられないことが明らかになった。また、死亡個体を持ち帰り送ったという事例からは、シマフクロウの価値は精神的な部分に拠るところが大きく、捕獲・殺害され肉や羽を人間に与えることよりも、そこに存在すること自体に大きな意味が見出されていたことがうかがえる。

#### 5. フクロウの飼育

生捕りにされたシマフクロウは基本的に持ち帰られ、一定期間飼育されたようである。ここでは飼育の有無および世話の仕方について、資料上に現れる記述の整理・検討を行う。

##### 5-1. 飼育の有無

シマフクロウを「飼育した」という記述は、千歳、新十津川、浦河町野深、新冠、鶴居村下雪裡、釧路春採の6事例でみられた。また、「フクロウ」および「コタンコロカムイ」まで対象を広げると、千歳、八雲、虻田、十津川町菊水、名寄、斜里、美幌（2例）、静内町農屋、新冠、音更の11事例で「飼育した」という内容の記述を確認することができた。

ただし、N.K氏（虻田）の「こつちでは飼ったことがないが、有珠では送ったことがある」（『コタン探訪帳』[5;1950-1970]）という記述のように、飼育の有無について判断が難しいもの、更には「飼育しない」という内容の記述も4例みられた。

iso ani kamuy [注：シマフクロウ] はとつたり飼つたりしてはいけないものだ。  
『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より S.T 氏 (男性) による語り (新十津川)

コタン コル カムイ [注：シマフクロウ] は飼わない。  
『アイヌ民俗調査IV』[10;1985] より 岡本ユミ氏による語り (様似)

Kotan kor kamui は飼はない。  
『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より T.M 氏 (男性) による語り (音更)

kotan kor kamui は飼つたことがなかった。子供が悪戯してはいけないから。  
『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より M.S 氏 (男性) による語り (虹別)

「飼育しない」という事例のなかには、検討を要するものが少なくない。例えば、S.T 氏 (新十津川) は同資料の他の記述で、フクロウの世話の仕方について述べている。したがって、この記述は「積極的に捕獲したり飼育したりすることはなかった」と解釈するのが適当であると考えられる。M.S 氏 (虹別) も「子供が悪戯してはいけないから」飼わないとしており、絶対に飼ってはいけないわけではないようである。また、T.M 氏 (音更) はフクロウを「飼育しない」としているが、同地域の T.T 氏 (音更) は「kotan kor kamui は飼つてみて熊の仔より大事にして iomande したものだ」(『コタン探訪帳』[5;1950-1970]) と述べており、同一地域内で異なる記述がみられることにも注目できる<sup>10</sup>。また、「飼育した」ことがうかがえる記述のなかにも、「昔は飼育した」という記述が3例みられた。

昔は、飼って幼鳥を送ったらしい。  
『アイヌ民俗調査X』[16;1991] より 白沢ナベ氏による語り (千歳)

梟はこの辺にあまりみないが昔は飼つておいたこともある。  
『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より S.T 氏 (男性) による語り (八雲)

やしなふといふことはしない。(昔は飼つた)  
『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より W.W 氏 (男性) による語り (農屋)

シマフクロウの飼育・送りが早い時期に衰退した理由として、佐藤 (1961 : 263) は飼料不足、クマと比較した際の経済的な不採算性<sup>11</sup>、厳格な決まりによる飼育の手間などを挙げている。しかし、送りの衰退には、アイヌのくらしの変化だけでなく、フクロウの個体数の減少や分布域の縮小などの様々な要因が関係していることが推測される。フクロウの飼育・送りの変遷については、時代を遡って対象とする資料の幅を広げるなど、更に情報を収集し、検討する必要があると考えている。

## 5-2. 世話の仕方

佐藤 (1961 : 247) や更科・更科 (1977 : 547-548) によると、釧路地方でも特に古式の伝

統を受け継ぐ地域では、厳格な決まりにもとづき、家長などがシマフクロウの世話をを行ったようである。特に、更科・更科（1977：555-556）は様々な地域における事例を比較・検討し、「川漁を生計の中心にする地方」がシマフクロウを最高の神として崇めており、その地域では、古老たちのみが飼育や送り儀礼に参加することができたと述べている。

フクロウの飼育に関する具体的な記述は多くないが、山川氏（蘭越）と門野氏（十津川町菊水）が経験・見聞したフクロウの飼育に関する記述には、世話をする人が決まっていたという内容が見受けられた。

父が、フクロウ（カムイチカプ *kamuy cikap*）をあずかって（飼育して）、クマ祭のようにして送ったことがある。〔略〕 主に祖母（フチ *húci*）が、世話をしてあずかっていたが、子供が魚を籠に入れて持っていき、手ずからやってもかまわなかった。イモを入れたおつゆをキッチ *kitci*（木製のたらいのようなもの）を小さくしたものに入れて食べさせていた。

『アイヌ民俗調査XIII』[19;1994] より山川キク氏による語り（蘭越）

門野トサさんが17才頃、イトコがカムイチカプ *kamuy cikap*（フクロウ）を預かったことがある。〔略〕セツ〔注：檻〕のすきまが広がっているところから、ニマ *nima* でイトコの姉が食べものをやった。

フクロウのエサにはカジカ（エソクカプ *esokkapu*）やドジョウ（チチラクカ *cicirakka*）をやった。汚ない手でエサをやったら食べないなど、フクロウを預かるのはむづかしい。1年位預った。

『アイヌ民俗調査II』[8;1983] より門野トサ氏による語り（十津川町菊水）

山川氏（蘭越）の事例では、子どもたちがフクロウに餌を与えることもあったようである。浦川タレ氏（浦河）の事例にも「コタンの人がみなで魚を漁って食わせたりした」という記述がみられたが、「気に入らない人が来るとコタン コル カムイは目をあけない」（『アイヌ民俗調査IV』[10;1985]）ことがあったという。S.T氏（新十津川）の事例にも「あまり利巧でない者が餌をやると片目をつぶって *ainu ayai kara*（人を馬鹿にして）食はない」（『コタン探訪帳』[5;1950-1970]）という、類似した内容の記述がみられた。

また、フクロウを手に入れた場合は基本的にクマの時と同様に檻を作り、そのなかでフクロウを飼育していたようである。しかし、名寄で一例のみ、フクロウを放し飼いにするという内容の記述を確認できた。

*kotan kor kamui* は熊よりも偉い神である。人になれやすくはなしてやつても遊んで帰ってくる。*chicap settu* で飼っておくがなれると放し飼ひにする。

『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より K.I氏（男性）による語り（名寄）

フクロウの飼育・送りが衰退した理由として、従来は飼料不足や世話の手間などが挙げられてきた。しかし、この事例が示すように放し飼いが行われていたことを鑑みると、ここではフクロウの世話がそこまで「手間」ではなかった可能性が推察できる。フクロウの飼育・送りが衰退した理由について、飼料不足や世話の手間とは異なる視点からも検討を

行っていく必要があると考える。ただし、現時点で放し飼いにに関する記述を確認できたのは本事例のみであり、更なる事例の収集が課題である。

## 6. フクロウの送り

送りを再現した記録を除いて、実際に行われたフクロウ送りの様子を詳細に記録した民族誌的資料は存在しない。今回対象とした聴き取り調査の記録においても、儀式を主導する立場で送りに関わった経験を持つインフォーマントはおらず、記述の内容の多くは、親以前の世代からの見聞もしくは自身の幼少時の経験にもとづくものがほとんどであった。フクロウ送りの具体的な事例とその様子に関しては、佐藤（1961）や更科（1933）、更科・更科（1977）、長谷川（1995）、宇田川（2004）がすでに報告しているため、ここでは、フクロウ送りに関する記述を確認できた地域と送りを指す言葉という観点から、北海道アイヌのフクロウ送りについて検討する。フクロウに限らず、動物の送り儀礼には、その送りを「儀礼」として成り立たせる諸要素（頭骨やイナウの存在、人びとの参加など）が存在するが、今回は当事者の「送る」という意識の有無に着目し、フクロウの「送り」に関する記述を広く抽出した。

図1はフクロウ送りに関する記述がみられた地域であり、各番号が示す地名は右側に記載した。種が明示されているものに関しては、シマフクロウは「●」、エゾフクロウは「◎」で示した。「フクロウ」および「コタンコロカムイ」などと表記される、種に関しては検討の余地が残されるもののフクロウ送りが行なわれていたと考えられる地域は「○」で示した。基本的に、インフォーマント1人の情報が1つの「○」に対応するが、阿寒布伏内と下雪裡に関しては、1人のインフォーマントがシマフクロウとエゾフクロウの両方の送りについて言及しているため、「●」と「◎」の2点を示した。千歳、美幌、荷負の3地域で「○」が重なり合っているのは、複数のインフォーマントによる事例が確認できたためである。

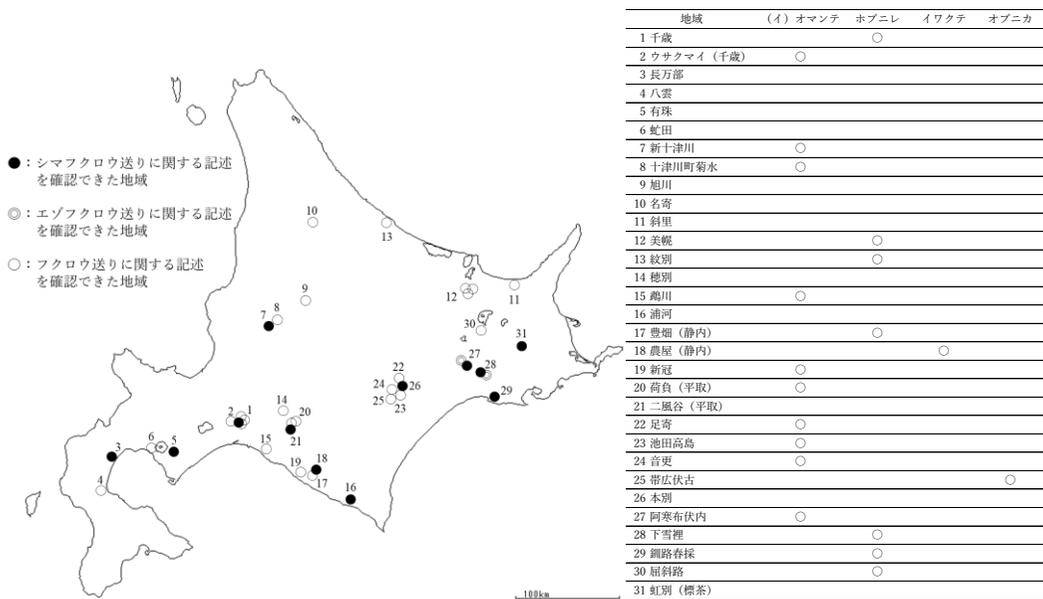


図1. フクロウ送りに関する記述を確認できた地域と「送り」を指す言葉<sup>12</sup>

なお、この図には「送りがあった」と考えられる地域のみを反映させており、フクロウ送りに関する記述であっても「送りはなかった」と説明される地域や、送りの有無についての判断が困難であった地域は示していない。「送りがあった」ということを判断できなかったのは、以下の4事例である。

子供の時、今から40年以上前に、狐を家で飼っていたが、それも送ったのを覚えている。フクロウを送ったのはまだ知らない。

『河野広道ノート』[2;1982] より川村ムイサシマツ氏による語り（旭川）

梟 これの祭もきかない。

『コタン探訪帳』[5;1950-1970] より Y.H 氏（女性）による語り（北見常呂）

オマンテ omante（送り）もしない〔注：シマフクロウ〕。

『アイヌ民俗調査IV』[10;1985] より岡本ユミ氏による語り（様似）

（葛野〔注：葛野辰次郎氏〕）コタンコロカムイ<kotan-kor-kamuy = 集落を-統率する神 = シマフクロウ>送るときは、なんてゆって送るべな。俺送ったこともないし、聞いたこともない。わからない。

『アイヌのくらしと言葉 3』[27;1993] より葛野辰次郎氏による語り（静内町東別）

これらの記述については、「送る対象として認識されていなかった」もしくは「送る対象ではあったが経験・見聞したことはない」という2通りの解釈が考えられる。しかし、情報が断片的であることから、現時点では検討が困難であった。

記述のなかに「送り」を示すアイヌ語がみられる場合は、児島（2007）に従ってその表現を分類し、併せて図1に示した。“（イ）オマンテ”と“ホプニレ”が多く、更に“イワクテ”と“オブニカ”を1例ずつ確認することができた。フクロウ送りの主な対象が生捕り・飼育された個体であったならば、児島（2007：37）が指摘するように、飼育個体が狩猟個体か、山で送るか村で送るかといった状況の違いとは無関係に、これらの言葉が使われていた可能性が示唆される。これまで、フクロウ送りを指す言葉については、佐藤

（1961：241-243）が「釧路アイヌは〔略〕コタンコロカムイのイオマンデは、モシリコロカムイ・オブニレと言うのが普通である」と説明したほかは、ほとんど言及されてこなかったが、地域によって差異がみられることが明らかになった。ただし、聴き取り調査には日本語で「送り」あるいは「祭」と記載される事例も多く、また、今回は口承文芸を対象としていないため、送りを意味する言葉の検討は不十分である。対象とする資料の範囲を広げ、新たな情報が追加されることで、より詳細な検討が可能になると考える。

## 7. おわりに

北海道アイヌはシマフクロウを“カムイ”として捉え、“コタンコロカムイ”や“カムイチカブ”などの様々な名称を与えて「送り」の対象としていた。立派な体格や威厳ある風貌もシマフクロウが“カムイ”とみなされた理由の一つと考えられるが、聴き取り調査の

記録からは、アイヌの人びとはシマフクロウの特徴を鳴き声や食性に見出していたことが明らかとなった。これらの記述には、シマフクロウの鳴き声は悪いものを遠ざけ、変事を知らせ、クマの居所を知らせる役割を持つこと、また、シマフクロウが川辺に残す魚は人間や他の生き物への授け物であるという考え方が見受けられた。

聴き取り調査の時代には、フクロウは積極的な狩猟の対象ではなかった。主な入手方法は幼鳥の生捕りだが、上手く巢立つことのできなかつた幼鳥を連れ帰ることが主で、巢まで捕りに行ったり親鳥を捕獲・殺害したりするという記述はみられなかった。また、近年では死亡したシマフクロウを持ち帰り、送ることがあったようである。これらの事例からは、物質的価値という側面では捉えきれない、フクロウの存在価値の大きさがうかがえる。

フクロウは神位の高い“カムイ”であるため、飼育の際には様々な配慮が必要とされた。世話をする人が決まっている地域もあったが、村全体で飼育に参加する地域もあった。名寄で一例、フクロウの放し飼いが行われたという記述が確認されたことは注目できる。放し飼いがあったならば、飼育の負担はそれほど大きくなかつたことが推測され、飼料不足や世話の手間とは異なる送り・飼育の衰退理由が考えられるためである。

フクロウ送りに関しては、道北など一部の地域を除き、北海道の広い範囲で記述を確認することができた。捕獲や飼育に関する事例から、フクロウ送りの対象は基本的に飼育した個体であることが想定されたが、送りを表す言葉は多様で、今回は“(イ) オマンテ”、“ホブニレ”の他“イワクテ”と“オブニカ”を1例ずつ確認することができた。

今回は限られた時代の事例を網羅的に検証することを試みたため、フクロウ送りの変遷や地域比較について述べるには至っていない。フクロウ送りの「フクロウ」が指す種についても、検討の余地が残る。また、歴史的な史料を対象から除外したため、聴き取り調査以前の時代におけるフクロウの捕獲・飼育・送りの実態や、フクロウの持つ経済的価値<sup>13</sup>についての考察は不十分である。以上については今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿は筆者の平成26年度北海道大学文学部卒業論文「北海道アイヌとシマフクロウの関係—地域・時代差から捉えなおす名称と送り—」の一部を加筆・修正したものである。卒業論文の執筆に際しては山本純郎氏、弟子屈町図書館の松橋秀和氏に多大なる御高配を賜った。改めて、ここに厚く謝意を表す。

## 注

1. 更科源蔵はアイヌ文化に関する多くの著作を残したが、調査年月日や採録地に関する情報が不明な場合が多く、先行研究では参考資料として参照される程度にとどまっていた。『コタン探訪帳』は、弟子屈町図書館が所蔵する更科の調査記録（ノート）である。これは約350人のアイヌ文化伝承者からの聴き取りの記録であり、インフォーマントや場所、年代などのデータが詳細に記されている。齋藤（2002：80）は同資料について、「昭和20年代から40年代にかけてのまとまった聞き取り記録は他に例を見ず、個別具体的なアイヌ文化の伝承者からの最後の記載と評価できる内容を持っている」と評しており、筆者も更科の刊行物と併せて『コタン探訪帳』を使用した。
2. 佐藤（1961）の内容は「大正時代に、釧路春採コタンの老人たちについて聞き書きしておいたものに、近く阿寒郡阿寒町字アクベツ村の酋長の家柄であつて、自宅で縞鳥を送つたことのある秋辺福松老人（七十八歳で昨年死亡）の経験談の口述と、阿寒郡鶴居村下雪裡で育ち、本年七十八歳で十五、六歳の時に自宅で飼っていた縞鳥を送つた経験者、八重藤吉老の談話を参考として書いたもので、私も実際に見たことがないから、ただ調べたものを忠実に検討し、総合して書いたもの」（佐藤 1961：243）であり、犬飼・名取（1969）の記録は、幼い頃にシマフクロウ送りを経

験した新十津川の樺勘太郎氏（当時 70 歳）による、1937（昭和 12）年の送りの再現にもとづくものである。

3. 本稿で対象とする調査記録は原則として、採録時期およびインフォーマントに関するデータが明示されているものとする。
4. 「クマの居所を知らせる」という性格は、資料ではエゾフクロウに対する説明としてみられることが多いが、シマフクロウを指す事例も存在する（宇田川 2004；山本 2017）。
5. 更科・更科（1977：553-556）は、主な生業が川漁ではない地域、すなわちシマフクロウがあまり重要な存在ではない地域で、“フムフム”という呼称がみられると論じている。
6. 白沢氏は他の記述のなかで、シマフクロウの呼称として「カムイ チカプ kamuy cikap」を挙げている。魚を食べるという特徴からも、この「フクロウ」はシマフクロウを指すと考えられる。
7. 本稿における「狩猟」は、「野生の鳥獣をいろいろな猟具、罠、猟犬などを用いて捕獲殺害すること」（石川ほか 1994：361）と定義する。
8. この「mosiri kotori」は、同一の話者が別資料でシマフクロウを「モシリコトトリ」としていることから、シマフクロウを含む内容であると判断した。
9. 更科・更科（1977：547）によると、屈斜路湖畔では欠木幣（チメシュ・イナウ）で魚の形をつくって罠をかけ、シマフクロウを捕獲・殺害することがあった。しかし、このような事例は他にみられず、また、『コタン探訪帳』でもその記録を確認することができなかった。フクロウの狩猟については今後の検討課題としたい。
10. T.T 氏は明治初期、T.M 氏は明治中期頃の生まれで両氏の生年には 20 年ほどの差があるため、この「飼う／飼わない」の違いが、フクロウの飼育・送りの衰退の過程を示していると考えられることもできる。しかし、フクロウ送りの変遷を明らかにする上では異なる時代の資料の検討が必須であり、これは今後の課題である。
11. 佐藤（1961：262-263）は、「熊の方は毛皮や胆が高価に売れるから何んとかやつて来たが、縞鼻の方は全然金にならないので、経費倒れになるところからやれなくなった」と述べている。
12. 図の作成には「CraftMAP」を使用した（<http://www.craftmap.box-i.net/>）。
13. 林子平の『三国通覧図説』にみられる「鷲、嶋鴉ノ類ヲ養テ箭羽ヲ取也」という記述は先行研究でもたびたび言及されているが、特に大塚（1987：83-84；1995：118-120）は、ワシタカ類の矢羽に対する需要がフクロウにも及んだことで、現在に伝わるフクロウ送りが成立したものと推察している。しかし、近世蝦夷地におけるフクロウの利用実態は未だ明らかでなく、フクロウの価値に関する問題については、和人側とアイヌ側の双方の視点から考察する必要がある。

## 参考文献リスト

秋野 茂樹

2004 「北海道アイヌの動物神の送り儀礼：シカの霊送りを中心に考える」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター、札幌、511-525 頁。

2009 「アイヌの祭り：動物神の霊送り儀礼を例に」『季刊考古学』107: 59-64.

石川 栄吉、梅棹 忠夫、大林 太良、蒲生 正男、佐々木 高明、祖父江 孝男

1994 『文化人類学事典』（縮刷版）弘文堂、東京。

犬飼 哲夫、名取 武光

1969 「イオマンテ（くま送り）」アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌 下』第一法規出版、東京、549-576 頁。

宇田川 洋

2004 「シマフクロウの送り儀礼」宇田川洋編『クマとフクロウのイオマンテ：アイヌの民族考古学』同成社、東京、111-131 頁。

大塚 和義

1977 「アイヌの動物飼育」『季刊どるめん』14: 43-48.

1987 「なぜ、アイヌ最高の儀礼なのか（鼻送り、コタンコルカムイ・イオマンテ）」『季刊民族学』11(4): 81-84.

1995 『アイヌ：海浜と水辺の民』新宿書房、東京。

児島 恭子

- 2007 「口承文芸・文献資料にみられる送り儀礼」木村英明、本田優子編『アイヌのクマ送りの世界』同成社、東京、33-43 頁。
- 齋藤 玲子  
2002 「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について：弟子屈町立図書館所蔵資料の紹介」『北海道立北方民族博物館研究紀要』11: 79-107.
- 佐々木 史郎  
2007 「北方諸民族におけるクマ送り儀礼」木村英明、本田優子編『アイヌのクマ送りの世界』同成社、東京、2-32 頁。
- 佐藤 孝雄  
2004 「送られた動物」宇田川洋編『クマとフクロウのイオマンテ：アイヌの民族考古学』同成社、東京、73-89 頁。
- 佐藤 直太郎  
1961 「釧路アイヌの縞鼻送り：モシリコロカムイオブニレ」佐藤直太郎『佐藤直太郎郷土研究論文集』釧路市、釧路、241-263 頁。
- 更科 源蔵  
1933 「コタン夜話一(釧路堀斜路村のアイヌに就て)」『ドルメン』2(8): 50-53.  
1984 「川魚の神」更科源蔵ほか『シマフクロウ』平凡社、東京、4-9 頁。
- 更科 源蔵、更科 光  
1977 『コタン生物記 III 野鳥・水鳥・昆虫篇』法政大学出版局、東京。
- 竹中 健  
2006 「ヒグマとシマフクロウ」天野哲也、増田隆一、間野勉編著『ヒグマ学入門：自然史・文化・現代社会』北海道大学出版会、札幌、86-101 頁。
- 知里 真志保  
1962 『分類アイヌ語辞典 第二巻 動物篇』日本常民文化研究所、東京。
- 長谷川 充  
1995 「アイヌ民族とシマフクロウ」『ゆのみ』21: 75-93.  
2003 「『日本の天然記念物 エゾシマフクロウ』を読む」『ゆのみ』29: 70-87.
- バチェラー・ジョン  
1925 『アイヌ人とその説話』富貴堂書房、札幌。
- 北海道立北方民族博物館 編  
1991 『北海道立北方民族博物館展示解説』北海道立北方民族博物館、網走。
- 山本 晶絵  
2017 「北海道アイヌにおけるフクロウ類の呼称に関する研究：聴き取り調査資料を中心的題材として」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』17: 31-53.
- 山本 純郎  
2004 「シマフクロウの生態」宇田川洋編『クマとフクロウのイオマンテ：アイヌの民族考古学』同成社、東京、205-212 頁。

(やまもと・あきえ／北海道大学大学院文学研究科)